講演

中等教育改革の根本視点——教科と人間

都留文化大学学長　上　田　　薫

ただ今御紹介いただきました上田でございます。私はずっとこの大学に御厄介になりまして，１７年程おりました。それから東京の方に行きまして１６年余りになりました。時々名古屋にもまいりますが，この大学にこういう形でまいりましたのは始めてでありまして，大変懐しく参上した訳でございます。この学校は私がおりました頃から，先生方が一所懸命に努力しておられましたが，その頃は研究会という形のものがなかったように思うのです。その後，重ねてこういう研究会をなさって来て，大変素晴らしい成果を上げていらっしゃるのは，大変有難いことだと思っております。

ところで，今の学校教育というものが大変難しいところにあるということは，どなたも御存知な訳であります。ことに中学校です。もちろん高校も大変難しいんですけれども，義務教育ということで，中学校が焦点になりやすいし，校内暴力とか非行とかも，中学校を中心として多く見られます。そういうことにどう対して行けば良いかということは，誰もが心配する訳ですけれども，色々規則を厳重にするとか，家庭でもっとしつけをしてもらうとか，色んな対応のし方がありましょう。それらが全く無意味とは私も思いませんが，やはり根本は学校での教育が，指導が生徒たちにどうかかわって行けるかということにある。戦後，殊にこの２，３０年，その点で問題が多くあったんではないか。今，そういうものが重なり重なって解き難い，難しい問題を我々につきつけているのだと思います。それを解いて行くためには，それだけ時間をかけ場を広げて行かなきゃいけないんであって，なんか手取り早く処理することによって乗り越えようということでは，非常に大きな間違いを更に生じさせるんではないかと私には思えます。

今日申し上げたいと思いますことは，そういう意味で中学だけの問題ではございません。高等学校はもちろん，小学校も，あるいは大学も同じ問題を持っている訳です。何を教えるべきであるかという問題をめぐって，我々は今まで色々な苦労を重ねてまいりました。そのことが間違っているんではありませんが，それをもう一度，置きなおして，確かめてみるということが必要だと思うのです。実はこの全く当り前のことを徹底して考える条件がお互いにない。毎日毎日忙しいですから，教えておかなければ次がやれないし，そのうちまた入学試験もあるし，色んなことにせまられまして，これで良いのかな良いのかなと思いながら，実は見切り発車と申しますか，そういうことで過ごして来てるということがあったんではないか。これまでの中等教育が完璧であって，素晴らしいと思っていた教師が多い，という訳ではないと思うんですね。でも，お母様方にそういうことを言いますと，「理屈はそうかも知れないけど，家の子どもがあの学校に入れなかったらどうする？やっぱり良い学校に入らなければ就職もダメだ，一生不幸になるじゃないか，その現実をどうするか？」というふうなことで，いつも物別れというんでしょうか，説得できないで来た訳です。そういう点から言いますと，今私が申しますような根本的な見直しをやるという条件は，いくらか学校側にとっては，有利な事態にあるんじゃないかと思うんですね。依然として現在，非行は沢山ございますし，登校拒否もある。その現実から見ますと，とにかく教えましょう，これだけ教えておかないと，後で困りますよ，という論理というものは，やはりそこで壁にぶつかるんではないか。壁にぶつかるというのは，今申しましたように，やっぱり良い学校，良い会社，良い官庁という風にお考えになっていることに対して，「そういう風に考えていると，とんだことになりますよ」ということですね。そう申し上げても，そう誇張でないというか，「そんなこと言われても」という風に，家庭の方で反論されることが，今は比較的少ないというか，家庭自体がそういうことに困惑しているということがあると思うんですね。だからこそ今，そういう見直しをしなくてはいけないと私は思うんです。いけないと申しますのは，やり得る見通しがあると思うんです。ところが今の教育現場というものは，本校の場合は私はつぶさにしませんけれども，今申しましたような意味において良い教育を積み重ねていらっしゃると思うんですが，今の小学校，中学校，高校の教育現場を見ますと，はっきり言うと非常に低調なんですね。低調と申しますのは，指導力がない，教師に能力が欠けているということではなくて，もちろん十分だという風には言えないかも知れないけれども，それはそんなに弱くなってないのに，ヤル気が出ないとか，やっ

てみてもどうにもやり甲斐のある条件が作れないとかですね，その他様々な要素がありまして，はっきり言うと，本当に教育に対して自分を打ち込ませるということが，何か行き詰まるというよりは，行き詰まらせてしまっているような空気がある。

私はいつも言うんですけれども，例えば野球を例にとりますと，3割打てるバッターが2割5分しか打てなければ，これは監督としては，はなはだ困る訳です。でも3割打てるバッターはそんなに沢山いませんから，2割6分か7分は打てるということを前提において選手を集めているのに，それがみんな2割そこそこしか打てない。要するに力が出ないんでは，監督は失格だと思います。どうも今の学校運営を見ておりますと，そういうきらいがある。これは校長とか監督だけが悪いってことじゃない。もちろん責任はありますけれどね。何か一般に先生方に，アテがはずれたためのやる気の無さがある。例えば校内暴力にしても，あれだけ一所懸命教えて，あれだけ面倒見て来たのが背いて来る，ということですものね。これは家庭の母親のケースには比較的多い。あれだけ家の子のことを心配して来たのに，親から離れて行く，親を裏切るっていう風なことで非常に悩んだり，カッカしたりなさってるんですね。それと同じことが，教師の場合にもあって，こんなに生徒が我々の努力を受け入れないっていうんじゃ，もうやりようがない，先生という仕事は出来ないとか，もういやになってしまったという風なこと，そういう種類の，まあ例えが悪くて大変申し訳ありませんけど，戦争で言うと厭戦ということがある訳ですね。イヤになって来ると当然負ける訳ですが，それに似たようなものが，今の教育現場にはあるように感ずるんですね。これはとっても恐ろしいことだと思う。　少々テクニックが下手くそであるとか，教材研究がうまく行ってないとか，もちろん，それは良いことではありませんけれども，それでもとに角，先生方がある期待を持ち，やる気を持って教室に入って来られれば，それなりのことがあると思うんですけれども，そこがちょっと弱い。ということは，子どもの方にもよく分かる訳ですね。そういうことから脱却するためにはどうしたら良いのか。さっき申しましたような特効薬みたいなものがあって，それを注入すれば元気になって来るという具合には行かないようでして，ここでもう一度，教師というのは一体何をするものかとか，我々は生徒に対して何を期待するのかということを，もう一度置き直すということが必要なんではないか。そんなことはいつもやってるよとお互いに思いたいですけれども，実はしかし，そこまで腹を据えて考えてみますと，指導の方法もカリキュラムも実は色んな問題点があるんではないかと思います。そういうことで本校が試みられる研究にも意味が出て来るんじゃないかと思うんですが，その時の観点ですね。今，教師がやる気が出ないような学校の状態では，どうにもならないと申し上げましたけれども，これは子どもの方でもそうでありまして，ある教科は全然ダメでも，しかしこの教科はいけるぞということがあれば，それなりにその生徒には活気が出ます。それに対して，まあまあどの教科もなんとか一応の所には行けるけれども，どれにも大して興味はないし，学校の生活に期待がないという風な子どもは，まあ成績を見ればまずまずと見えるかも知れませんけれども，やはり人間がだんだん成長して行くという点で考えますと，とに角，良い姿ではないと思いますね。ところが今までの考え方からすると，とに角，落第点がいくつかあるということはもう致命的でありまして，一つあっても，それでお前はダメっていうことになりがちです。何となく万遍のない，そうかと言ってオール・ラウンドということでもないと思うんですが，そういう人間というものを我々はいつも前提に考えている。どこかある所がうんと突出して，ある所がおっこちているという風な人間の面白さというのか，活力というようなものは評価できない訳ですね，今のシステムでは。

私が申し上げたいのは，もちろん教科にかかわらずそういうことは考えられますけれども，なんて言ったって，学校は教科ですよね，教科の学習ですよね，問題になるのは。そういう時に，「出来なくっても良いよ」とは簡単に教師としては言いにくいんです。でもね，出来方のバラエティって言うんでしょうか，それも色々ありますよって言うんではなくって，その人間，その生徒のあり方ですよ，大事なのは。平均すれば同じ点になっちゃうんです。それではその子は全くつかまらないんです。ですから山あり谷ありという風な，景色と言えば悪いですけれども，私はそういうものに対する把握こそが，評価の根本的な問題だと思うんです。どうもそれを数字に表わして平均化するという所へ行きたくなっちゃうんで困る。そうすると生きた人間には対応出来ませんよ。誰だってそうなんで，野球がうんと好きなやつもあるし嫌いなのもある。相撲は好きだけどバレーは嫌いだとか，美術が好きだとか音楽が好きだとか，いろんな我々だって趣味を持っておりますけれども，「あなたは趣味を万遍なく持ちなさい」「どの話でも一寸は乗れるようになりなさい」なんて言われたってですね，とてもこっちは意気上がらないですね。釣りが好きなら釣りが好きで良い。それについては一晩寝ないで語っても，まだ尽きない程の何かがある，その代り，例えばゴルフの話はまるでダメだとか，それだってちゃんと人間として通用してる訳ですからね。趣味とは違って，教科の内容は大事

だから，あるレベルまで行くことが必要であるというお話は確かに良く分かるんですけれどもね，でも生きた人間がだんだん成長して行って，社会の中で，どういう働きをするかということを考えた時に，そういう平均点だけで評価するというのは本当は一寸おかしいんじゃないでしょうかね。たしかにあるものは全然ダメという人間はそこで損をしたり，人に迷惑をかけたりするということはありますけれども，でもそういうことを言い出せば，教科にかかわらず人間にはそういう欠点は必ずある訳でして，欠点の少ない人間も結構だけれども，でも使いものになる人間ということから考えると少々の欠点があっても，何か非常に魅力的な所がいくつかあるっていう方が良いのかも知れませんでしょう。私が言いたいのは，要するにもういっぺん中学校なら中学校，高校なら高校のカリキュラムを考えて，今のような意味において，その人間のあり方が，魅力的という表現はアイマイで情緒的であると叱られるかも知れませんが，その人間自身が発展しうるような状況であるかどうかを確めるぐらいはやっても良いんではないかと思うんですね。平均点は良くないけれどもこの子の方が将来性あるぞ，この子はここん所を中心に行けば相当行けるんじゃないか，という風に見ることは十分出来るでしょうからね。

そう出来ますと，生徒も学校へ来るのに張り合いとか楽しみを持てる。もう教科の方がマズイというのであれば，運動でも良いです。何かある事柄を，特別の事柄だけを張り合いにして来るというのは，学校から見れば困るんでしょうけれども，最初はそれでも良いじゃないですか。校門をくぐって来る時に，その子がある個性的な，生き生きしたものを持って入ってくれれば，あとはだんだんその子に即して，より価値のあるものの方へ持って行けば良いんであって，これは案外やり甲斐ありますですよね。イヤだ，イヤだというのを無理やりやらせるとか，やれてないのをやったという風に計算してみるとかいう風なことは，やってても非常に楽しくないんですが，「君，そういうエネルギーをもうちょっとこっちの方へこうやったら生かせるんじゃないか」とか，「これも面白いじゃないか」という風にあまりあせらずに誘導して行くということは，私はそれ程難しくはないと思いますし，また楽しみもありますよね。ところがそういうことをやる余地が今の学校には非常に少ない。生徒指導とか進路指導とか色んなのがありまして，確かによく配慮されているとも言えそうですけれども，今言ったようなことから言いますと，本当にはおよびでないって言うんでしょうか，一番その子の燃えているような部分にはノータッチというんでしょうかね，悪くすると水をかける形になっていると思うんですね。そこの所をなんとか出来ないか。私が申し上げなくても，先生方はそういうことは先刻御承知と思うんですが，枠が邪魔してるんでしょう。この際その枠を，全面的に動かすということはこれは大変ですけども，少しずつ動かすことは出来ないのか。少し動けばあとは違ってまいりますよね。

私はどうもこの辺で先生方には叱られそうなお話をすることになるんですが，一番邪魔になっているのはさっきから申しましたけど，教科というものだと思うんですね。中学校，高校の先生は免許状も教科で出来ている訳で，その教科というものに問題があるという風になると非常に困る。小学校ならば全科目ですから，教科なんてものは乗り越えちゃって良いということになる訳ですが，中学校・高校では非常に困りますよね。ところが実際には案外小学校の先生は，教科にとらわれているんですね。前の国語の時，この子はこうだったから，今度社会科の時，こうじゃないかとかね，ここでこういうことを言えば前の算数の学習にこういう風につながるとか，というようなことは十分に考えて小学校の先生は授業をしている筈だと思うんですけども，実は全然ダメなんですね。まるで国語の時間のその子と算数の時間のその子とは別ものなんですよね。そういう前提でやる人が教科に対して熱心というのか忠実というのか，教科の学力がある教師ということらしいですね。どうなっているのかと思いますね。問題は教えたことが本当に，その子どもの中でどうなっているかを確かめないから，評価，評価とやかましく言っているくせに。本当にその子どもの中で沁み込んだ形でどうなっているかということを問題にしないから，今度は理科ですよ，今度は家庭ですよとスケジュールの通り，計画の通り，サッサッとやって行ける訳ですね。色んな教科で学習したことが一人の子どもの中でぶつかったり，絡んだり，つながったりするという所には先生の目はいつまで経ったって行かないんです。

小学校でもそうなんだから，中学校ではますますそういうことになりかねないんですけども，私は折角教科の専門の免許状をお持ちになっているのならば，本当はそういうことはないだろうと，音楽の先生は音楽以外のことは目もくれないなんて馬鹿げたことはないんじゃないかと思いたいんです。美術の先生の研究会があると，美術の先生ばっかり集まっている。絵の勉強をする，美術的な問題をみんなで討論するというんならば，それはそれでも良いと思うんですが，そうではなくて美術教育なんです。音楽教育なんです。あるいは数学教育なんです。その教育をされる子どもというのは，ある中学校の，ある高校のカリキュラム，スケジュールの中で他の教科もやってるんです。色んな

ことをやってるんです。それがその子の中で色々動いているということは否定できないのに，それは一寸棚上げにして，数学の部分だけ，英語の部分だけ，理科の部分だけつまみ上げて，我々は研究するんだ，だから他の教科のやつなんかは必要ないとお考えなんでしょ。私はこの態度はどうも学問的でないんじゃないか，科学的でないんじゃないかと思う。音楽教育の研究会には美術の先生は当然来てなきゃいかんでしょう，英語の先生も欲しい，体育の先生も理科の先生も顔を出してくれないと，美術教育の研究は出来ないというのが，どうも本当じゃないかと思うんですが，そういうことを言うと，一寸頭がおかしいんじゃないかと思われたりする。それが乗り移っちゃって，小学校でも国語を得意とする先生ばっかり集まってやってるんですね。理科の先生ばっかり集まってやってるんです。そういう面も必要かも知れませんですよ。だけど理科の指導の結果が他の教科の中にはどう生きているだろうか，教科に生きるんじゃなくて，その子どもの中に全体的にどう生きているかという問題はいっこうにお考えにならない。要するに子どもの中の数学的部分とか英語的部分とか，あるいは体育的部分とか，まあそういう言い方は変ですけど，ピンセットでつまみ上げたり，真空の容器の中に入れまして，そこで色々なさるだけであって，それがもとの全体性をもった人間に帰った時どうなるかというお話はないんです。

例えが悪いかも分りませんが，手術は成功したけど，患者は死んだということがありますね。手術の名人という医者がいると，なんでも切っちゃうんです。それは一応成功する訳ですよね。その患部としては。だけどそのために心臓が弱ったり，色んなことがあって，結局，「残念でした」というようなことになるとすれば，それを成功と言えるのか。部分としては成功してるんですよ。それに近いことが沢山ある。「オレの授業は天下一だ」とおっしゃっている教科の先生がいて，それはまあ上手に教える訳ですよ。だけどそれで教わった子どもが，全体的に伸びて行くということがない。教わった教科すらもあまり好きになってない。ペーパー・テストすればある程度良い点を取れるんですがね，それだけなんです。私は本当の専門性というのは，オレの教科はそんなに出来なくても良いぞ，お前は一寸オレの教科は今，難しそうだから少しお休みしろ，その代わりに他の教科はしっかりやれ，この教科を頑張れと言ってやって，様子をそれとなく見ている。そして，あっ，そうなって来たらオレの教科もこの程度，こういう風に指導してやれるぞ，という風に思う。それが出来て初めて専門職なのではないでしょうか。教科専門の免許状をお持ちになるということは，そういうことではないかと私は思うんですよ。ところが何でも良いから，自分の教科を沢山教えれば良いとかね，他の教科のやつよりは期末テストの平均点が良いからオレは優秀な教師だなんて思うとすれば，これは本当に素人だと思いますよねえ。本当の玄人は，そんなに自分の教科がどんどん力が伸びて行くというんですか，とに角，理解されて行くというようなことをそう簡単には喜ばないと思うんですよ。やっぱり子どもの，その生徒の全体が伸びて行く中で，オレの，私の教科がどういう風に生きているか，それが教育の問題だという風に私は考えると思います。そういう考え方はおかしいかどうかですね，また御批判をいただきたいと思うんですが。

決して私は教科内容のレベルが低くて良いなんて申し上げているんじゃないんですが，問題はその生徒が人間としてどういう発展をして行くかにかかっているんであって，それに数学も英語も国語も理科も技術家庭も，あらゆるものが非常に有意義な働きをすれば素晴らしい訳でしょう。この子においてはこの教科はカゲに入りなさいとか，この子どもの場合はこの教科を中心にしましょうとか，そういうことを先生方ももう一寸検討なさったらどうか。そういう学校はあまり沢山ないけれども，日本にもいくつかあったんですがねえ。それは私流の，またその学校流の言い方をすれば，教科を乗り越えるということになる。教科を乗り越えるというのは，教科を良い加減にするということではないんです。英語の先生は時々，国語の授業ぐらい当然のぞかなければいけないでしょう。それだけでなく体育の授業をのぞいてみたり，理科の授業を一寸のぞいたりする。そうすると自分の教科ではまるで御通夜みたいな顔をして，下を向いたきりの子どもが，さっそうとしてリーダー・シップをとっているなんてことがある訳ですよね。うーん，あの教科ではあの子はああいう風にやれるのか，それじゃあ私の教科でも一寸やり方を変えたり，別の工夫をしたりすれば相当いけるかも知れない，もしそれが無理なら，あの子はあの教科であれだけ潑剌としてるんだから，あれを生かして中学校の教育，高校の教育を彼にとって，彼女にとって非常に意義のあるものにすることは出来ないだろうか，私はこの教科の教師として非常に残念だけども，あの子の場合には私は下積みになろう，そういうことだって考えられる訳でしょう。たとえ下積みになろうとお思いにならなくてもですね，そういう風に子どもを御覧になると授業が違ってくるんですよ。今まではとに角，少しでも学力っていうか，良い点数が取れるようにと指導していらっしゃったのが，点数なんかそんなに取れなくても良いよ，それがあとあとその子の中でよく生きるように，単なる教科だけでなく，もっと広いところで利き目のあるように，オレは

この教科を教えるぞという風にお考えになるようになればですね，あまりカッカとしなくなるんですよね。腹が立ったって腹の立てようが違って来る訳です。

一所懸命用意をして，一所懸命教えてらっしゃって，思うように行かないってんで，頭に血が上っている，それはまあ本当に御同情申し上げなくてはいけないと思うんですが，実のところなんであんなに怒らなくちゃならないのか。それは精神的にも身体的にも良くないことだと思うんですよ。もっと本当の意味でゆとりを持てば，うーんと成果が違って来ると私には思える。しかしそのためには，今言ったように，その子にとって表に出る教科とか，裏に入る教科とか，今はうまく行ってないみたいだけど，後でぐっと上がるとか，という風に，中学校，高校の教育に対する対応が複雑になり変化を持って来る必要がある，それが主体的になるということだと思うんですよ。その方が専門性が高いんではないだろうか。今みたいにとに角，いつでも良い点を取らなくてはダメとか，成績の順番に並べてみるとか，これは非常に簡単明瞭ですが，人間を扱うやり方，人間に対するあり方としては，非常にシンプルで，うまく行かないことが出て来る。その結果が非行とか暴力とかになって来ているという面が強いと思うんですが，それは当り前じゃないか。どの子どもも，とに角，自分なりのペースで自分の持っている全体を生かしながら学校教育を受けて行くということが，もしいくらかでも出て来れば，私はそんなに学校に対して反逆するとか，教師を恨むとか，そういうことはあまり出て来ないんじゃないかと思うんですよね。だけど，そんななまぬるいことしたら日本人の学力が落ちる，今の世界１，２を争う経済成長というものがダメになっちゃうということなのか。まあ確かに経済力はあるかも知れませんが，あんまり世界の中での評判は良くないし，そればかりでなくて，国内にも色々つっかえていることが多いですよね。そのあたり一体どうなのか。

社会科のあり方についても，高校あたりで大変問題があると思います。でも今はもっと良く分かることで申し上げますと，小学校の低学年にもっと国語や算数をやらせて基礎学力をつければ中学校も高校も教育がもっとうまく行くという風に思う人があるんですね。非常に不可思議なことです。時間を増やしては悪いというんではないけれども，どういうことをやろうというつもりなのか。コンピューターはあるし，ワープロはどうか知りませんけどね，国語だって算数だって，だいぶ違って来るはずなんですが……。とに角，なにか計算や書き取りを早くたたき込んでしまえば，あとは素晴らしい人間が出来るってんでしょうか，それとも例えば無難な扱い易い人間が出来るってんでしょうか。私は思うんですが，ロッキード事件というのがありまして，大きな問題なんですね。でもロッキード事件があったから，さて特設道徳をどうすりゃ良いかとか，あるいは社会科をもっとこうしたら良いという話はちっとも出て来ないんですね。そういちいち政治の事件によって，学校教育の中味が動かされるってのも困るけれども，全然関係ないってのも何となく寂しいんですよね。今，核っていう問題がある。これはやっぱりエライことだと思いますねえ。「核の冬」っていうＴＶがありましたけども，何としてもそういう不幸は避けたいということになるならば，そのことをどうして小学校や中学校のカリキュラムに入れないのか。入れないって言うよりは，道徳の時間をやめにして「核」っていう時間にしても良いでしょう。でもそういうことはみんなどこか横によけてしまうわけですね。私が今言ったようなことは例ですから，なにもそうしろと言っているんじゃないですけれども，今の世の中でこういうことが必要だから，これだけ教えなくてはイカンゾとうるさく言っているくせに，今の世の中の色んな重大問題なんてものは全く埒外になってるんです。どういうことなのか。

私はもっと色々な内容を取り上げろと申し上げているんじゃなくって，むしろそういう問題は子ども達が自分で考えることが出来る，視野の広い人間に育って行ってくれれば，そこでやってくれるんだと思うんです。もちろん今，教育の内容にそういうものをかかわらせて悪い訳はない，必要なことは多いと思いますけれども，ただ原爆反対なら反対を唱えれば，もう二重丸という訳にはいかんでしょう。やはり人間がどれだけ自分で考えることが出来るか，またそれを考える材料を的確につかむだけの視野を持っているかということが重要で，これは私は相当に急ぐと思いますね。臨教審の方は何を考えるか知りませんけども，非常に困ることは先がはっきりしないでしょう。２１世紀と言っても自信がない。私なんか全く自信がない。どういう世の中になって行くのか。一時は非常に幸わせな，幸わせそうな世界が出て来るように思ったこともあったようですが，今はとてもそうは考えられません。そういう非常に困難な事態の中に，今の中学生，高校生は正面からそれを担う者として入って行く訳なんですね。だからこれも教えたい，あれも教えたいということは分かるけれども，その世界自体に対して我々が十分考えてない。考えても限界があるということがカリキュラムにどう反映しているか，そのあたりがあいまいですと，古い世代の，というか教える側の自己満足だ，少し勝手じゃないかと考えられても私は弁解しにくいと思うんですね。子どもたちにはそんな理屈が良く分かっているかどうか分かりませんけれども，な

んか感づいてるんじゃないでしょうか。今の大人というのはあんまり信用できないのに，その大人が絶対こういうものを身につけておかないとお前たちはダメだぞと言うとしても，一寸ついて行きにくいんじゃないでしょうか。

どうも今は教師も親も指導力がない，ヘナヘナしてる。殊に男性はダメだと言われていることに弁解する訳ではありませんけどね。昔の親みたいに，単純に将来を考えて，自信を持って自分の子どもに方向を指し示すということが出来なくなっているということは，やっぱり事実です。だからヘナヘナの教育をしろ，と言うんじゃないですよ。確定できない，不確定な世界に対して我々は教育をやっているんだから，そういうことが明確に教育の中心に存在しなくちゃいけないということだと思うんですね。ところがどうもそういう風には考えないみたいですね，文部省も。そして校内暴力とか非行とかいうんでなんとか押えようとする。押えることは悪いんじゃないけど，それは子どもたちの安全のためではなく我々大人の安全のために押えようとすることが案外強いんじゃないか。やはり許すべきでないことは子どもに許してはいかんと思うんですよ。厳しくあることは必要だと思いますけど，それが我々のために，教える側の都合のために厳しくするというのは問題だと思うんですね。いや，そういうことじゃない，子どもたちのためだと言うんでしょうが，「本当ですか？　本当にそうなんですか？　その教科の学力はそんなに要るんですか？」という風に開き直られた時に，「絶対要るぞ」と言えるのか。中学３年生の教科書を御覧になれば，社会科なんかのを見れば，そこら辺で大威張りしている文化人だって，とてもついて行けないようなことが一杯書いてある。高等学校に行けば尚更でしょう。どうせそれは通過して行く訳なんだから，もちろん教科書にあるものを全部覚えなきゃならん訳はないですけれど，しかし覚えてないと点数下げるんでしょう。教科書に書いてあることは半分覚えてりゃいいんだ，半分覚えてりゃ 100点をやるというのなら話は分かりますよ。80％覚えているやつは覚え過ぎだから点数を引くというのなら分かりますよね。その辺の所がいかにも教える側本位の体制にあるということだと思いますね。そういうことの象徴みたいなのが，私は教科だという気がするものですから教科というものが非常に良くない，あえて言うと必要悪だと考える。決して教科をヤメちゃえというのではないんです。でも今言ったような人間と教科がどういう風にぶつかり合ってかかわることが出来るのかという問題をしっかり我々の前に据えないと，今の難問題は解決どころか，解決の方向にも向かわないと私には思える訳ですね。

しかし今のようなことを申してまいりますと，はなはだ教育する側には都合が悪い。子ども・生徒に即した教え方やカリキュラムをやれと言われたって，大変難しいです。難しいけれどもやっぱり，人間がそれぞれ違っているとすれば，違っていることは学校では知らんぞ，学校では画一的な中学３年生，高校２年生というのを設定して，それにあわせてだけ指導するぞ，はみ出している部分は勝手にちょん切れ，足りない部分は勝手に足せ，ということで教育が出来るか，教師になれるかという問題になりますよね。やはり教師は，学校は，様々な状態にある子どもを正面に置いて対応せざるを得ないというか，対応して行かなくては教育にならないと思いますね。何も子どもの数だけカリキュラムが要るっていう訳ではないですけれどもね。その子ども特有の歪み，歪みと言っては悪いようですが，山あり谷ありのデコボコですね，そういうものをむしろ大事にして，ブルドーザーですぐ平均してしまうことはやめ，むしろ，それに教師は拠点を求めて指導をすすめて行くということをやっぱり考えなきゃいけないんじゃないでしょうかね。それは出来ないことではないと私は思っている。色んなやり方があります。何人か対象にする生徒を作って，それを手掛りにしながらやって行くという学校もだい分ありますが，一人の教師が４０人，あるいはそれ以上の子ども達に対応するやり方というものは私は色々出来ると思います。言うまでもないことですが人間によって，今言ったような必要なものが若干違ってるということもあるし，進むペースが違いますよ。マラソンやったって，初めに飛び出すようなのもあるし，ラスト・スパートがきくのもいる訳でして，それをいつでも一斉にならんで進めなんてバカげたことは言えません。ある生徒は一寸立ち遅れる，だけどその子が後で取り返すことが出来りゃいい訳でしょう。それに応じたような指導をどうやったら出来るかということですね。それも個別指導じゃなくて集団の指導でです。私はこれは難しいけれども色んな研究が出来るはずで，それをやろうとしないのは言い訳が出来ない所だと思うんですね。戦後，中学校の教育がうんと問題を持ったのはそこなんですよね。一律に，一律に行こうという，それは人権を尊重するからだなんて勝手なことを言うけれども，結局は教師が楽をするためにやったんだと言われても仕方がないと思うんです。それぞれの子どもに適しいものを指導して行ってこそ，それぞれの人権は重んぜられるということなんです。

しかしながらそういうことをするためには，我々教師がもっと人間を良く理解する，もっと言えば人間に対して興味を持つことが大切です。小説一つ読んでも，この小説はどうも人間が良く表わされてない，ま

るで類型的で，型の如くであるということになると，あまり良く評価はしませんねえ。ところがこの話は主人公だけでなくて色んな人物が生き生きしてる，奥行きを持っているというのは，文学としても評価出来ましょう。ＴＶドラマであろうがなんであろうが，人間をそれだけ豊かに表現出来るということは，それだけ人間理解が深い，ということではないでしょうか。我々は小説を書く訳ではないけれども，指導するということは，そこに座っている何十人かの子ども，人間をどういう風に豊かにとらえることが出来るか，そのことにかかっていると言っても間違いじゃないと思う。英語の指導をするんだからそんなことは要らないよ，数学だから人間には関係ないよという風にお考えになるかどうか，私はそこの所の問題だと思うんですよ。やはり我々は教師なんだから，もちろんある教科内容を与える訳ですけれども，まず教えられる子ども達の中に深く入って，その個性的な動き方，あり方をマスターしなければ，教材研究だって出来ない。さっき言ったように，「わかった」と言えば成功してるんじゃないんですよ。教室から出て行く時に，「ウーン」と言って首かしげてる方がはるかに学習効果が上がっている場合が多いんです。「わかりました」って元気良くやっているのは，教師として大変有難いようなんですけれども，これは全く空振りと言うか，迎合である場合が少なくないと思います。簡単にわかっちゃったと思ってるんです。早分かりする，という人もいますね。こちらが半分もしゃべると「わかった」とこう言うんですよね。それで済んじゃうから困っちゃう訳ですよ。まだ分からない，残された所もいつもあるという状態は，これはとっても素晴らしい状態だと思いますね。いつもそういう首のかしげ方を子ども達がしてくれるということを大事にすべきじゃないでしょうか。分かったと言うのはいくらでも言えるんですけれど，分からないというのは非常に個性的なんです。むしろ教育の評価というかネライはそこに向けないと，だまされると言ってはいけないでしょうが，空振りになりますでしょ。そういう風に考えて行くと，今すぐ分かるよりは明日，明日よりは明後日，少し時間を置いてある分かり方をする方が，はるかに指導は成功している。「オレはすぐ分からせる」と言う先生は，私は最低だと思っているんですが，その辺りもカリキュラムの作り方にてき面に影響すると思います。

人間をどう理解するか，早く理解する人間は頭が良いとか，気持ちが素直で私を尊敬してくれるとか，そういう甘い考え方を持つのがどうも教師の陥りやすい病気なんです。逆に「あいつ，オレの言うこと聞かないな」と思う時に，その手ごたえの中に素晴らしいやり甲斐のある場を発見出来る。そういうやつの方が見込みがある，これは色んな所で先生方も御経験になったと思うんです。初めからハイハイと言ってついて来るのは，本当に困るんですからね。初めは色々と抵抗があって，ぶん殴ってやりたいと思ったようなのが，何年か経つと素晴らしく仲が良くなるとか，こちらの言うことがとっても良く分かってくれるとかいうことがあるんじゃないでしょうか。それが人間が変化するということの一番根底的なもので，焦点をそこへ合わせると，遠くに焦点が結ばれて来るということを考えざるを得なくなる。そうなると，今の中学校，高校の教育も変わります。それが変わらないで，いくら大学入試，共通一次をどうしろ，こうしろと言ってみてもダメなんですね。共通一次が悪いんじゃなくて，その制度にかかわっているあり方がまずいんです。大学の教師も非常にまずいんだと思います。そういうものを変えて行かないとダメなんで，日本の現状では，共通一次やめて他のなんとかやればうまく行くとか，絶対に良い方法をあみ出せとか，そんなこと言ったって無理じゃないでしょうか。我慢しながらやって行けというんではない。今言ったように，本当に我々が目ざすものは何だ，本当に出来るものは何だ，ということをもう一ぺん考えたいということなんです。そういうことで，いくらかお考えに役立つことがあれば大変幸せだと思います。大変勝手なことを申し上げました。